

最優秀賞

「私の未来は、なに色？」

―自分で作る色―

京都府立鴨沂高等学校 二年

村田 大知

私は高校二年生である。一年半前に山口県から京都に来た。一年半後にはどこにいるのだろう。

今は京都の紫野にある大徳寺の塔頭・聚光院に小僧として住み込んでいる。中学卒業と同時に親元を離れ、自分にとって知り合いもない右も左もわからない京都に単身で来た。聚光院は千利休の菩提寺であり、毎月利休忌が行われている。国宝の狩野松栄・永徳の襖絵を所有し、今年三月までは実物を展示していた。日々禅宗の厳しい勤めがあり、毎朝法衣を着てお経を唱えている。まわりの大人たちは恵まれた環境だと言う。拝観謝絶の寺に住まっているのだから、その寺に自由に入りにできる自分は確かに羨望に値すると思う。茶道三千家の社中さんたちにとっても、月々の茶会に携わり、年代物のお道具を手に取りれることは素晴らしいことだろう。国宝の襖絵を毎日間近で眺めることもできた。禅の教えを和尚さんから直接伝授していただいている。

しかし、この環境に身を置くようになったのは自分の意志ではなかった。中学三年生でまだ反抗期でもなかった私は、親の勧めで京都に来た。寺での生活は忙しく、何も考える余裕がなかった。一年が過ぎた。茶道や寺の行事には詳しくなかった。檀家さんからも京都のおいしい和菓子をいただいた。懐石料理や精進料理も何度も食べたし、祇園で舞妓さんと会食する機会もあった。いずれも受け身である。自分の意志で、自分から望んでということがなかった。

そんな時に京都・観光文化検定を受けてみないかと誘われた。一年目は誘われたので受けてみた。結果は不合格。このとき、私の中で何かがはじけた。好奇心。主体性。意欲。私のもっと京都のことを知りたくなった。京都文化クラブを立ち上げ、部長になった。十七人のメンバーが集まった。自分の足で歩いて、京都の寺社を巡った。祭りを見に行った。博物館にも行った。門前菓子を買って部員と分けて食べた。自分の意志で、再度、京都・観光文化検定の勉強を始めた。今年は三級と二級を同時受験するつもりである。京都に来てよかったと初めて思った。検定の公式テキストに載っている寺社に自転車で行けるのである。他府県から宿泊を伴って見学会に来る祭りを、学校帰りに見られるのである。アジサイの美しい三室戸寺に行った。祇園祭り巡行の辻回しを目の前で見た。伊藤若冲の命日に石峰寺に行った。六波羅蜜寺で空也立

像を見た。今まで教科書の挿絵などで見てきたものが、目前にある。見たいと思うものに出会うことができる。

京都国立博物館の国宝展に行った。毎日ともに過ごしてきた狩野永徳の花鳥図がガラスケースの中で展示されていた。その取っ手を持って開け閉めしていた襖絵が、手の届かないところにある。身近にあったときにもっともっと鑑賞しておけばよかった。まわりの人たちに羨ましがられた訳が分かった。今、京都の勉強がとても楽しい。今年の検定のテーマは『京都・茶の文化』である。知らず知らずに経験したことはかりだ。千家十職の道具、三千家の系譜。茶面・大徳寺の茶室。世界が変わった。見るものに色がついた。私は親の勧めで寺に入り、このまま修行を積んで僧籍を取るものだと思っていた。未来は薄墨色だと思っていた。それに不満があるわけではない。しかし、私の未来は自分で決めることができる。何色もの可能性がある。仏の道もある。京都文化を学べる大学への道もある。茶道の専門学校という道もある。初めて親に相談すると、地元に戻ってきてもよいと言われた。漁業でも農業でも自分で考えたことなら自由にやっていいと。もともと畑仕事を実家で手伝っていたのだが、今、それが寺での生活で生きている。寺の広大な畑で毎日のお供えの野菜を栽培しているのだ。これもつながっている。自分から動く色が見えてくる。袈裟の薄墨色。京都を象徴する濃紫。茶道の

抹茶の色。畑の土の色。山口の懐かしい海の色。いろいろな色を取り混ぜて豊かな深みのある薄墨色に染め上げることができる。未来はなに色にでも染めることができるのだ。私は今十七歳。まず自分で考え行動することを大切にしていきたい。それに気づき、実践する力をくれたのは京都であるかもしれない。自らの成長であるかもしれない。親との対話であったかもしれない。まだまだ色は増えるだろう。その色を定着させるためには、努力が必要である。どの色も色あせないよう、可能性をいっぱいに広げられるよう、意欲的に、目を見開いて生きていこう。色彩にみちた世界は美しい。何よりも楽しい。